

## 7. 乳牛の飼養管理における福祉レベル評価方法

畜産科学科 食料生産科学講座 瀬尾哲也・薦野 彩・山元 侑

メールアドレス seo@obihiro.ac.jp

【目的】日本も加盟国の一つである OIE（世界動物保健機構）は現在、世界的な家畜福祉ガイドライン設定に取り組んでいる。2010 年までに「飼育舎」「飼育管理」における家畜福祉基準が検討される。EU も 2006 年 1 月に「EU 動物福祉 5 カ年行動計画 2006 年－2010 年」を開始し、家畜福祉活動を促進している。その計画によれば 2010 年には、家畜福祉総合評価法に基づき、その水準をクリアした畜産システムの認可に関する法的整備、最高級畜産物ブランドの確立、それを保障する技術的、財政的サポートシステムの開発を目指すとしている。その計画が実行されれば、家畜福祉基準を満たしたとラベルされた最高級品と称される畜産物が、EU から日本に輸出される可能性が高い。国内畜産を守るためには、科学的で客観的な家畜福祉評価指標の開発とそれによる畜産物認証システムが不可欠である。我々は、乳牛の日本型の家畜福祉総合指標作成を目指している。

【方法】平成 16 年度にオーストリアやドイツで現場での家畜福祉評価に利用されている ANI (Animal Needs Index) 法により、十勝管内の 36 酪農家を評価したが、評価方法や基準に不明な点が多くあった。そこで、本学フィールド科学センターで飼養されている搾乳牛群を利用しながら本指標を改良し、日本でも適用可能な評価指標を考案した。それを十勝管内の酪農家 27 戸 39 牛群で適用し、各農家の福祉レベルを評価した。

【結果】ANI 法は評価の容易さ重視のため、施設・設備測定に偏重しており、屋外運動場の有無施設評価だけで、福祉レベルがほぼ決定付けられた。しかし我が国では屋外運動場のない飼育環境が大半であるため、牛舎での飼育管理を適正に評価できる指標への改良を試みた。動物側の反応である正常行動発現の容易さ、病傷事故記録、栄養状態、人に対する恐怖反応性等を追加する改良を行った。今後は、本指標をさらに洗練すること、本指標の有効性について検討する必要がある。

## 【研究成果】

Welfare assessment on Japanese dairy farms using the Animal Needs Index, 3rd international workshop Assessment of animal welfare at farm and group level, 97, 2006

家畜福祉、現場評価の幕開け (1) 畜産の研究 60 (3) 353-355, 2006

家畜福祉、現場評価の幕開け (2) 畜産の研究 60 (4) 457-462, 2006

家畜福祉、現場評価の幕開け (3) 畜産の研究 60 (5) 571-578, 2006

ANI (Animal Needs Index) 法による乳牛の福祉レベルの評価, 日本家畜管理学会・応用動物行動学会誌 (42) 1: 86-87, 2006